【書評】

Guoping Zhao (ed.), *Levinas and the Philosophy of Education*, New York / Abingdon: Routledge, 2018.

レヴィナス哲学を主題的に論じる教育学研究は、2000 年代に入ってから盛んに行われるようになった。その当時の教育学は、教育の自明の目的として据えられていた近代的主体に備わる自律性や合理性の限界を明らかにし、その限界を克服しようと試みる研究が流行していた。レヴィナスの哲学が教育学に受容されたのは、そのような文脈においてである。2000 年に行われた American Educational Research Association の年次大会でのパネルディスカッションの内容を基にした特集が、2003 年に *Studies in Philosophy and Education* 誌に組まれ、そして、2009 年には、*Levinas and Education: At the Intersection of Faith and Reason* という論文集が出版された。レヴィナスに関するこれらの教育学研究の主な関心は、レヴィナスが論じたことを仔細に検討し、彼が論じたことと教育学の先行研究との差異を明らかにした上で、教育学研究の枠組みを解体し、再構成することにあった。この潮流におけるレヴィナスに関する教育学研究は、レヴィナスの論じたことを忠実に解釈する試みだったと言える。

教育学のレヴィナス受容は、2010 年代以降、異なる様相を呈するようになった。近年では、レヴィナスの諸観念についての忠実な解釈というよりは、教育の社会的・政治的諸課題を検討するために、積極的にレヴィナスの諸観念を拡張して用いるという方向性が採用されるようになってきているのである。この方向性のもと編まれたのが本書 *Levinas and the Philosophy of Education* である。現代の教育の諸問題を探究するために、レヴィナスの諸概念に対する創発的な拡張がなされ、また、レヴィナスと他の思想家との比較や混交、さらには、他の研究領域とレヴィナスの思考との混交が積極的になされている。「この論集は、多くの刺激的な新しい場所へ読者を導くだろうし、私たちの教育的な世界の倫理的な生きられた次元に関する、レヴィナスの思考の様々な重要性を再び活気づけることに寄与するだろう」と、編者のグォピン・ヅァオは述べている（p.4）。このヅァオの狙いが、どのように本書において達成されているかを以下では各章を概説しながら確認していこう。

第 1 章「レヴィナス、デュルケーム、教育の日常的な倫理」において、アンナ・シュトラーンは、新自由主義的な色彩を帯びた言葉で彩られる教育の言説のなかで、教育に関する倫理的な問いが繰り広げられる状況を問題視する。例えば、経済の行き詰まりから移民政策に対する批判が高まり、それに応じて歴史教科書の記述の変更が議論される状況をシュトラーンは取り上げている。歴史教科書の記述の変更が国民の歴史認識や共同体観を排他的なものへと変えることを促す危険性をシュトラーンは読み取っている。シュトラーンは、このように有用性や効率性を軸にして倫理について論じるのではなく、教育の日常的

な場面から倫理について探究する道を提案する。その際の主な参照項が、レヴィナスとデュルケームの倫理と社会に関する議論である。そこでは、レヴィナスの論じる倫理に関する考察が深められる中で、日常生活における対人関係を成り立たせている応答性の重要性が提示される。本章は、教師と生徒との日常的な関わり合いのなかでの一つひとつの言葉が倫理を再創造し続ける可能性を明らかにしている。

ヅァオは、第 2 章「単独性と共同体：レヴィナスと民主主義」において、近年の教育学における共同体論でのレヴィナスの議論の位置を再検討している。差異を尊重した教室、多様性を認め合うことのできる学校が求められる近年の教育学において、全体性に帰着しない人間の関係性を構想するレヴィナスの哲学は度々参照されている。しかし、それと同時に、主体性の起源を前-自我的な経験のうちに見るレヴィナスの議論を、具体的な政治的・教育的な議論へと援用することの困難が指摘されてもいる。ヅァオは、このように位置づけられるレヴィナスの議論を、差し迫った政治的な問題や教育に関する問題に関与させる道を探究すべく、レヴィナスの語りと聞くことに関する議論に注目する。そこでは、語りによって証し立てられる主体の単独性、そしてその単独性を尊重する聞くことの重要性が提示される。何を話すか、を重視するのではなく、「話す」ということに存する表現的な契機のうちに、人と人との応答性によって裏打ちされた無条件の責任の共同体があることをヅァオは論じていく。そして、そのような無条件の責任の共同体を、学校、教室の中に築いていくように、教師がまず、語ること、そして聞くことの実践を注意深く行っていくことの必要性が説かれる。

エマ・ウィリアムズとポール・スタンディッシュによる第 3 章「光ではなく音：レヴィナスと思考の原理」は、レヴィナスの他者に関する論述が拓く教育学の議論の領域を拡張しようと試みている。彼らは、レヴィナスの他者に関する論述を、他人との関係に関する議論としてだけでなく、人間の思考を独自の視角から新たに描きだした議論として捉える。その際、彼らは、レヴィナスの音をめぐる論述に注目することによって、西洋哲学において伝統的に光を媒体として理解される思考概念によっては捉えることのできない人間の思考の側面を提示する。光や視覚をめぐる語彙群で理解されてきた思考概念は、主題化、概念化、表象という用語で特徴付けられる。しかし、論者らは、そのような形で理解される思考概念を成り立たせる原理としての言語に注目することを通して、思考が、他者によって言語的に働きかけられる、すなわち呼びかけられることを契機として生起する側面を提示する。思考に存する受動的な側面を描き出すことによって、近年の教育学で注目される「批判的思考」や「思考スキル」において前提とされる思考の一面性を浮き彫りにしている。

「教えの再発見：ロボット掃除機、非独我論的教育、解釈学的世界観の限界について」において、ガート・ビースタは、統制としての教えに対する批判の妥当性を問うている。近年の教育学では、統制としての教えは、学習者を教師の統制の対象としてしか捉えず、

学習者が主体として存在することを許さないものである、という批判が多く提出されている。その批判の結果、学習者が主体的に学ぶことができるように、教師の役割を学習のファシリテーターとして捉え直そうという方向性の議論が蓄積されている。ビースタは、「ロボット掃除機」というメタファーを用いることによって、統制としての教えに対する批判がもたらす、学習者の自律的な学びの強調を問題視する。ビースタによれば、あたかもロボット掃除機が、部屋の形状を認識し、知的に適応し、効率よく掃除を行うようになるかのように人間の学習をイメージすることは、学習を、学習者の解釈と把握の行為として捉えることにつながる。ビースタは、レヴィナスの意味作用に関する議論を参照した上で、上記のような学習観が、学習者の解釈によって構築された意味作用で満ちた世界の中で、学習者の独我論的な世界の解釈の推進をもたらすと述べる。この問題を乗り越えるために、世界を自己の観点から理解可能な意味作用によって解釈可能なものとして捉えるのではなく、そのような観点から世界を解釈する自己の枠組みを中断することの必要性を説く。その中断を学習者にもたらす点にこそ教えの意義があること、そして、「教えられる経験」による学習者の主体化の可能性をビースタは提示している。

クラレンス・ジョルダスマによる第 5 章「他者としての教師の時間的な超越」は、学習者中心の教育が主流となっている近年の教育をめぐる潮流における教師の役割について探究している。ジョルダスマは、教育が学習者中心に大きく傾斜することによって、教育が教師によって何かを教えられるというよりも、学習者自身の内的過程として捉えられるようになる傾向を問題視する。教育が学習者自身の内的過程であるならば、学習者はどのようにして「これまで知らなかった何か新しいことを知る」ことができるかとジョルダスマは問うているのである。この問いに答えるために、レヴィナスの時間をめぐる論述を手がかりとすることによって、教師が、何か新しいことの学習、何か未だ私に含まれていないことの学習を可能にする、という筋道を描き出す。そこでの教師の役割を、他者としての教師、超越としての教師という仕方で提示している。

第 6 章「身体化した教育」において、シャロン・トッドは、感受性、物質性、身体化というレヴィナスの概念を探究することを通して、教育学における身体をめぐる議論を深化させている。トッドは、近年の教育学が人間の身体に備わる物質的な側面を強調することによって、身体に備わる感性的な側面が見過ごされてきていることに注意を払う。そこでトッドは、レヴィナスの傷つきやすさや曝露に関する論述を参照しつつ、人間の身体に備わる感性的な側面を強調する。身体の感受性が、人間の変容を基礎づける場として存することを示すトッドは、人間の変容を論ずる教育学にとって、身体の感性的な側面が重要であることを提示する。そして、身体に備わる感受性に注目することを通して、理論化不可能な領域が人間の変容には存することを浮き彫りにするトッドは、教育学もまた理論化不可能なもの、名づけ得ないものが、その理論のうちに入り込む余地があることを考慮する必要性を説く。

第 7 章「全ての事柄に責任を取ること：21 世紀の気候にレヴィナスを関与させて」を著したベトサン・マーティンは、現代社会における気候変動などの環境問題の主要因を、人間の自由と自己関心を重視した社会のあり方に見る。マーティンは、人間の自由や自己関心に傾斜した現代社会に普及した考え方の限界を論じるために、レヴィナスの責任概念に注目する。そこでマーティンは、レヴィナスの責任、他者、顔に関する議論の考察が、人間同士の関係性に関する議論として取り上げられるだけでなく、人間と植物、動物、事物や環境との関係にも敷衍されるべきものとして探究する。そして、それら人間と諸事物との関係を、レヴィナスの議論を敷衍させつつ、応答性によって特徴づけることを通して、人間中心的に生きることから離れ、人間と自然を一体的に捉える方向性を提示する。さらに、気候変動などの環境問題を克服するために、近年求められている「持続可能性のための教育」を推進する際にも、人間中心ではなく、人間と自然とが相互に関わり合いながら、この世界を織り成しているという事実に向き合うことの重要性をマーティンは示している。

ここまで各章を概括してきたように、本書は、現代的な教育の諸テーマを論じ直すべく、様々なレヴィナスの諸概念を援用した論考によって構成されている。本書には、これら論考を一貫する一つのテーマがあるわけではない。教育と新自由主義との関係の問題を論じた第 1 章から始まり、差異を尊重することのできる教室と学校について論じる第 2 章、一面的な思考概念に基づいて推進される思考スキル育成の問題を提示する第 3 章、学習者中心の教育の限界、及び新たな教えの可能性や教師の役割を明らかにする第 4 章と第 5 章、教育学における身体をめぐる議論を深化させる第 6 章、持続可能性のための教育を論じる第 7 章に至るまで、実に多岐に渡った論考によって本書は構成されている。これら各論考のもつオリジナリティあふれるレヴィナス解釈の身振りが、教育学におけるレヴィナス受容の現在の到達点を示していると言えよう。「この論集は、多くの刺激的な新しい場所へ読者を導くだろうし、私たちの教育的な世界の倫理的な生きられた次元に関する、レヴィナスの思考の様々な重要性を再び活気づけることに寄与するだろう」（p.4）という編者のヅァオの言葉に偽りなく、意欲的な論集となっている。

ただし、本書全体を読み通した時に、ある違和感が残る。その違和感を二点にまとめると、まず、本書では当然のように教育の諸問題を乗り越えるためにレヴィナスの諸概念が援用されているが、その援用を可能にする根拠はどのようなものであるかが判然としない、というものである。教育学の用語と、レヴィナスの用語が同じという理由だけで、レヴィナスの議論を教育学に援用すると、目新しい議論につながるかもしれないが、説得力が不足している印象が残る。近年では、教育学におけるレヴィナス研究が蓄積されてきたために、あまり問われることがなくなってきているが、教育学とレヴィナスの関係可能性は改めて検討される必要があるだろう。

二点目は、各論考に共通するレヴィナス受容の仕方についてである。本書で確認できる教育学におけるレヴィナス受容は実に多様に見える一方で、各論考におけるレヴィナス受

容は特定の形式で行われている。すなわち、①現代の教育学において流行している概念や理念に注目し、②その概念や理念に関する教育学の議論の一面性を指摘し、③レヴィナスの概念を検討することで異なる角度から教育学の議論を眺め、深めることを可能にする、という形式である。このような形式は、レヴィナスに関する教育学研究に関わらず、教育学研究においてよく見られるものではある。しかし、この形式とは異なる仕方でレヴィナスを論じる教育学研究の可能性があるのではないか。

以上の二点の違和感は、「レヴィナスと教育学研究との関係の在り方」に関するものと総括できる。どのような根拠に基づいて、どのようにレヴィナスを教育学で論じるか。この問いへと進むことができるのは、レヴィナスと教育学との豊かな関係可能性を示して見せた本書の大胆な試みがあったからこそである。本書の成果を踏まえて、次のステップへの歩みを慎重に始めるためにも、レヴィナスに関する教育学研究を行う読者、及び、各章で取り上げられたテーマに関心のある読者にとっては重要な一冊であろう。

（安喰勇平）